

国際課活動レポート

◆和歌山県人ペルー移住110周年記念式典・祝賀会（10月10日～18日）

下副知事は、和歌山県人ペルー移住110周年記念式典に出席するため、県議会、県国際交流協会から構成される訪問団団長として中南米を訪問し、和歌山県民がペルーに移住してから110周年であることを記念したペルー和歌山県人会の記念式典および祝賀会に出席しました。和歌山県出身者及びその子弟ら約110名から歓迎を受け、下副知事は本県からのペルー移民のために尽力した初代移住者22名を顕彰するとともに、本県出身者への激励を行いました。



(顕彰の様子)

◆「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山（10月31日～11月1日）

世界各国の高校生が集まって津波の脅威と対策を共に学ぶサミットを、11月5日の「世界津波の日」制定の由来となった「稲むらの火」の発祥の地である和歌山県で開催しました。一昨年度は高知県、昨年度は沖縄県で開催され、今回で3回目となるこのサミットには、過去最高となる世界48か国の高校生（約400人）が参加しました。

サミットの開会に先立って、海外から来県した高校生は広川町で稲むらの火祭りに参加して濱口梧陵の精神に触れ、県内各地で実施されたスタディツアーで地元高校生とともに防災学習を通じて国際交流を深めました。サミットでは、まずテーマごとにグループに分かれた分科会にて、生徒たちが各学校の取組についてプレゼンテーションを行い、災害から世界中の人々の命を守るため、自分たちに何ができるのかを議論しました。その後の総会では、各グループの代表が議論の結果を発表し、県内高校から選ばれた2人の議長が、サミットの集大成としてまとめられた「稲むらの火継承宣言」を読み上げました。今回参加された高校生の皆さんには、この宣言にあるとおり、サミットで経験し、学習したことをそれぞれの国で実践し、広めていくことにより、世界中の防災意識の向上に貢献していただくことを期待したいと思います。

★「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山の公式ホームページにて、サミット当日の動画を含む様々な情報がご覧いただけます。

<https://www.tsunami2018wakayama.telwaka.tv/>



◆「熊野古道・サンティアゴ巡礼道」姉妹道提携20周年記念イベント開催！（12月1日、4日）

和歌山県とスペインガリシア州は、それぞれの聖地「熊野三山」と「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」に通じる「熊野古道」と「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼道」に共通する崇高な価値を認め合い、平成10年から姉妹道提携を締結し、姉妹道提携20周年を記念して、和歌山と東京において共同PRイベントを開催しました。

12月1日、ガリシア州政府観光局プロモーション事業部長による観光プロモーションと、3名の日本人アーティストによるガリシア音楽のミニコンサートを和歌山市内で開催しました。

4日には、発行部数が51万にも及びスペインを代表する観光雑誌、ヴィアヘスナショナルジオグラフィックの編集部長、ガリシア州政府観光局プロモーション事業部長、元熊野本宮館事務局長によるトークセッションや、両巡礼道の食・観光・伝統文化をPRするイベントを東京で開催しました。

イベントは多くの参加者が集まる中、大盛況の内に終了しました。

今後も和歌山とガリシア州の絆をより一層深めるとともに、多くの方々に訪れていただけるよう、お互いの巡礼道の魅力を世界に発信していきます。



◆第12回きのくにロボットフェスティバル2018（12月16日）



和歌山県と友好提携を結ぶ中国山東省の小中学生26名が来県し、「第12回きのくにロボットフェスティバル2018」に参戦し、1チームが小学生部門において3位の好成績を収めました。

また前日には、御坊小学校の児童20名とともに「日中ロボット交流会」に参加しました。交流会では合唱の披露や両国に関するクイズ大会、ロボットのトーナメント試合などが行われ、親睦を深めました。

皆さまこんにちは、国際課の阪口です。私は、2016年9月から約2年半山東省で生活をしてきました。この2年半の間に済南市では山東師範大学で中国語を学び、濰坊（イボウ）市では市政府で行政研修を受け、現在住んでいる青島（チンタオ）市では民間企業で研修を受けています。山東省の省都である済南市からスタートし、濰坊市、青島市と東へ東へと移動しながら3つの街で過ごし、様々なことを体験させていただきました。

ご存知の通り中国は非常に広い国です。同じ山東省内の街といえども、済南市と濰坊市が直線距離で約200km、濰坊市と青島市で約160km離れており、それぞれの街で方言があり、街の風景が違い、食べ物の味付けが違い、移動する度に新しい街に来たなあと感じました。

印象に残っているのは、濰坊市政府外事弁公室（国際関係の担当部署、以下「外弁」）での体験と風景です。濰坊市政府では全部署がそれぞれ、掌握事務に関係なく、市内のひとつの貧困農林魚村を受け持ち、その村の振興を行っています。振興施策は、職員の村での駐在、村民の研修・視察旅行の実施、道など生活インフラの整備、農林水産業に関する教材や資料の提供などです。私の研修中に農村での業務があり、同行しました。農村にたどり着く道は一本だけで、途中からは舗装されていない凸凹道でした。道も振興施策の一つとして近い将来に舗装する計画があると聞きました。私が行った農村は全部で200人くらいの住人がいて、主にショウガなどを作っており、農家の年収は日本円で約2、3万円とのことでした。



（濰坊市にある村）

小さな村の中を歩きましたが、集落の周りは畑だけがあり、にわとりが自由に歩いており、とても静かでした。一応道と街灯はあるものの、車も店もなく、普段生活している濰坊市街地と車で2時間程度しか離れていないのに環境の違いの大きさに驚きました。

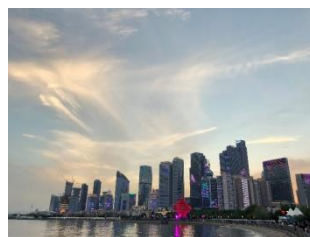
この農村に外弁の職員が駐在していて、彼の家には土間、中庭、倉庫、トイレがあり、大きな造りでしたが、村の家全てが同じ造りらしいです。その家でトイレに行く時、職員が「トイレに落ちるなよ」と笑いながら僕に忠告してくれたのですが、トイレに行くと、そこはトイレというよりかは小屋で、ただ、向こう側が大きく削られているだけでした。これは、し尿を後で肥料に使用するため、便利のようにそういう簡単な作りになっているということでした。業務が終わってから、村の代表者ら数人と一緒にその家でお昼ご飯を頂いたのですが、そこで、この村に外国人が来たのは初めてだと凄くびっくりしていました。そして私が箸でご飯を食べていると、「日本人も箸でご飯を食べるのか！」と村民の一人が非常に驚いていましたが、中国では日本も箸を使う文化だとみんな知っているものだと思っていたので私も驚きました。

経済発展が著しく、資産が一億円以上あるような裕福層も数多くいる一方、年収2.3万円の農民を多く抱える国であるというのは知識で知っていましたが、実際その村に行ってみると都市部や街とは生活様式や教育環境など、全てにおいて違いが大きく、まるで違う国に来たかのような印象を受けました。中国は今、この格差が大きな問題となっており、農村部での所得改善に力を入れているとニュースで見ますが、今後どのような施策でどのように改善されていくのか、問題の大きさを実感しました。参考に、今住んでいる青島の写真も掲載します。

昔から日本に多大な影響を与えてきた隣国であり、更に現在では関空から、例えば青島まで飛行機で3時間弱で着くような、時間面でも非常に近くなった中国ですが、やはり住んでみると生活習慣や人の考え方、様々なものが日本と違い、本当に多くを学び、様々な経験をさせていただいた2年半の山東省での生活でした。



（青島市新市街地）



（青島市旧市街地）

〈阪口昂（平成28年9月より中国山東省に派遣中）〉